

身近な昔さがす

未崎の昔を語る会

大船渡

大船渡市未崎町の未崎の昔を語る会（後藤榮男会長、会員70人）は9日、ふもと探訪の一環で「峯岸・内田・細浦周辺の昔さがし」を実施した。参加者らは地域に300年以上も前から伝わる神社や寺、石碑について現地に足を運びながら由来などを学んだ。

昔さがしには会員15人が参加。巡った箇所は東日本大震災の大津波で跡形もなく社殿が流された細浦漁港入口にあった松島神社跡、峰岸地内の県道と市道が交差する角（通称・イワギマエ）に建つ馬頭観世音・地藏尊・山人神、稲荷大明神を祀る同地内の「おかくら様」、内田公民館奥の瀧澤稲荷神社、細浦の

松島神社跡で説明に耳を傾ける会員たち（左）未崎町

長源寺など。

説明は同会の新沼紀三事務局長のほか、前会長の佐々木聖雄さん、同寺の谷山誠慈住職があたった。新沼局長は、多くの文献をもとに現地を踏査して作成した資料をもとに解説した。

この中で、地域のシンボリック存在だった広さ4畳半ほどの松島神社については、「祭神は市杵島姫命と弁財天。建立は宝永6年（1709）で現管理者は屋号・金山澤、滝田医院長の滝田有（たもつ）氏である」と説



か 1 〇 屋

明した。さらに「宝永6年は荒れ狂う大暴風の海上で遭難船が続出したが、金山澤家の漁船だけが1人の遭難者も出なかった。これは神仏の加護と信じ、金華山から弁財天の分神を受けて祀った」と由来を話した。参加した会員の1人は「身近なところに祠や石碑などさまざまな遺産があるのに、これまで分からなかった。先人たちの信仰の深さと郷土を知りたい機会だったと喜んでいた。」

2/12